

MERRIER Approach と第 2 言語習得理論

The MERRIER Approach and SLA Theories

浦野研

URANO Ken

I. はじめに

MERRIER Approach は、英語教師が英語を使ってより効果的に授業を行うためのガイドラインとして、1988 年にまず MERRI Approach として（渡辺, 1992; 渡辺・森永・高梨・斎藤, 1988）, そして 95 年に現在の MERRIER Approach の形で（渡辺, 1995）提唱されました。その根幹をなすのは、Stephen Krashen（1985 など）の主張するインプット仮説であり、理解可能なインプットを多量に与えることによって第 2 言語習得が促進されるという立場から、「学習者に分かりやすい英語を話したり書いたりする場合に留意する指標」（渡辺・野澤・酒井, 1997a, p. 30）として、Model (or Mime), Example, Redundancy, Repetition, Interaction, Expansion, Reward の 7 点を提案しています（詳細は、渡辺, 1995; 渡辺・野澤・酒井, 1997a, 1997b; また本論集の他の論文を参照してください）。

MERRIER Approach で提案されているこの 7 つの指標ですが、そのすべてが第 2 言語習得理論を厳密に反映しているわけではありません。むしろ Krashen らの主張を柔軟に解釈し、さらに教室環境など他の教育上の要素も考慮に入れた上での提案であると考えられます。したがって MERRIER Approach そのものが言語習得に効果があることを示した研究・考察はまだ不十分であり、それを支持する上でも第 2 言語習得研究の視点からその有効性を示すことが重要です。また、Krashen がインプット仮説を最初に提唱した 1980 年代前半からすでに 20 年近くが経過し、その間に第 2 言語習得の研究者間でもさまざまな議論が交わされてきました。その中でこれまでの主張の修正や新しい理論の提唱があり、本論ではそういった最近の第 2 言語習得研究の動向を踏まえ、MERRIER Approach を理論的な視点から再評価したいと思います。

II. MERRIER Approach と第 2 言語習得理論

MERRIER Approach と最近の第 2 言語習得研究とを比較すると、特に次の 2 点で関連性が認められます。

- ・インプットを理解可能にするための手段としての発話修正の効果
- ・理解可能なインプットだけでは不十分であるという主張

ここでは、この 2 点に絞って MERRIER Approach の有効性について考察します。

A. インプットを理解可能にするための手段

Krashen の主張に頼るまでもなく、理解可能なインプットが第 2 言語習得に不可欠であることは明らかでしょう。新しい言語に触れることなく、またその意味を理解することなく習得できると主張する研究者は、私の知る限りひとりもいません。したがって、英語教育ではインプットをどのように理解させるかが重要な関心事になります。いわゆる「従来型」の英語教育では、英語を学習者の母語（日本語）に訳すことによって意味理解を行なってきましたが、そのような訳読式に頼らずに生徒の理解度を高めることができるというのが MERRIER Approach の特徴です。例えば MERRIER Approach の前身である MERRI Approach（渡辺, 1992; 渡辺他, 1988）でまず紹介されたの 5 つの指標（Model, Example, Redundancy, Repetition, Interaction）は、すべて生徒の理解度を高めるために役立つと考えられます（渡辺他, 1988, pp. 17-18）。

第 2 言語習得研究では、より理解しやすいインプットを提供する方法として、インプットやインタラクションの修正（modification of input/interaction）の有効性が議論されてきました。インプットの修正（input modification）とは、インプットを生徒が聞いたり読んだりする前に言語的に修正、特に簡素化（simplify）することを指します。例えば、難しい語彙や文法を使わずに、あらかじめ生徒に理解可能であると思われる語彙や簡単な文法を使ったインプットを提供することなどが考えられます。インタラクションの修正（interactional modification）は、インプット修正のようにインプットの内容を簡素化してしまうことなく、生徒がインプットを理解できなかったときには、同じ表現を繰り返したり（self-repetition）、新しい情報を付け足したり（redundancy）、別の表現に言い換えたり（paraphrase）することによって理解度を高めようとする方法です。また、音声言語のインプット（listening input）の場合には、生徒が理解できているかを確かめること（comprehension check）によって、学習者の理解度に対してより正確な認識ができるという利点もあります。

インプットやインタラクションの修正がインプットの理解度を高めるかについては 1980 年代の初めよりさまざまな研究が発表されてきました。90 年代前半までの研究について、Yano, Long, and Ross（1994）が先行研究の結果をまとめています（pp. 195-200, 本論に関するもののみを掲載）。

- ・インプットの簡素化は、例外もあるが通常は理解度を高める。
- ・インタラクション修正¹とインプットの簡素化とを比べると、簡素化が常に優れているわけではない。
- ・音声言語の場合、インタラクション修正は一貫して理解度を高めている。
- ・いずれのタイプの修正も、能力の低い学習者に対してより有効である。
- ・ゆっくり話すこと以外は、1 つのタイプの修正のみでは効果が十分ではない。

以上から考えると、インプットやインタラクションの修正はインプットの理解度を高める上で有効であるようです。特に学習者の能力がまだ低い段階（日本の中学・高校が該当するでしょう）では、複数のタイプの修正を適宜織り交ぜるのが効果的でしょう。

上記のような実証研究とは別に、Michael Long（1983; 1996; Yano et al., 1994 など）は、理論

的な立場からインプット修正よりもインタラクション修正の方が第 2 言語習得にはふさわしいと主張しています。Yano et al. (1994) は reading input の修正について次のように述べています。

... removal of possibly unknown linguistic items from a text may facilitate comprehension but will simultaneously deny learners access to the items they need to learn. Linguistic simplification can be self-defeating to the extent that the purpose of a reading lesson is not the comprehension of a particular text, which learners are unlikely ever to encounter again outside the classroom, but the learning of the language in which the text is written and/or the development of transferable, non-text-specific, reading skills. (p. 191)

この主張のように、簡素化されたインプットはたとえそれが理解可能であったとしても、学習者にとって未知の項目がすべて抜き去られているため、インプットを理解できてもその中に新しく学ぶものは理屈上何もないことになります。それに対して、もしインタラクションの修正が理解度を高めることができるのなら、インプット中の言語項目（未知項目を含む）自体は保持したままなので、インプット理解と新しい言語項目習得の両方を達成できるだろうと考えられます。

MERRIER Approach のうち、Redundancy, Repetition, Interaction はこれまで紹介してきたインタラクション修正の特徴と類似しています。Redundancy, Repetition については、同じ用語が第 2 言語習得の分野でも使われていますし、定義上もほぼ同義と見てよいでしょう。MERRIER Approach 中の interaction は、「教師のみが話すのではなく、生徒と相互交渉しながら話す」（渡辺他, 1997b, p. 32）と定義されているので、comprehension check のようなインタラクション修正の特徴を含むといえます。上にまとめたこれまでの第 2 言語習得研究から、インタラクション修正はインプットの理解度を高めるのに有効であると考えられます。また、単に理解度にとどまらずに言語習得まで視野に入れたとき、インタラクション修正と似た特徴を持つ MERRIER Approach は学習者に新しい言語項目を習得する機会を提供しているということもできます。

B. 理解可能なインプットだけでは不十分か

第 2 言語習得にはインプット理解が必要であるという点に関して反論の余地はなさそうですが、その一方で、理解可能なインプットのみで十分かという点では意見が分かれます。インプット仮説を提唱し、それをもとにナチュラル・アプローチ (Krashen & Terrell, 1983) というインプット重視の外国語教授法を推進してきた Krashen は、理解可能なインプットの提供のみで第 2 言語習得は達成されると繰り返し主張しています (Krashen, 1985 など)。ところが、Krashen がインプット仮説を提唱した直後から、インプットのみでは不十分であるとする反論が相次ぎました。たとえば、カナダのフランス語イマージョン教育を研究してきた Merrill Swain (1985 など) は、学校生活のほとんどを第 2 言語を聞きながら過ごすイマージョン教育を経験した学習者たちが、聞く・読む能力などはとても高いのに書いたり話したりするときに初歩的な文法の誤りを数多く発すると報告しています。

普遍文法 (Universal Grammar: UG) の研究者たちは、インプットのみで第 2 言語習得が不十分

である（発話に誤りを多く含む）理由として、インプットを浴びているだけでは学習者が知ることのできない母語と第 2 言語と相違点がありうることを挙げています。以下のフランス語と英語の文を見てください。

1. *Je bois torujors du café.*
2. **I drink every day coffee.*

(Long, 1996, p. 424 より)

フランス語では、副詞の位置について英語より柔軟性のため、副詞を文末に持ってくることも、(1) のように主語と動詞の間に挟むこともできます。フランス語を母語とする英語学習者は、(1) の語順をそのまま当てはめて (2) のような英語を使う可能性があります。しかし英語では "every day" がこの位置にくることはありえないため、この文は誤りです。もしこの学習者がインプットを浴びているのみだとしたら、"I drink coffee every day." という文法的に正しい語順も獲得するかもしれませんが（フランス語ではこの語順も適切です）、それだけでは (2) の語順が誤りであるということを知ることができません。このような場合、学習者に (2) の語順が英語では不可能であるということを示す必要がある（negative evidence）と主張されています（White, 1987; 1989 など）。

言語習得の分野では、学習者の発話に対する教師などの反応をフィードバック（feedback）と呼びます。学習者の誤りについてそれを訂正するための教師の発話は特に corrective feedback と呼ばれ、negative evidence 必要性の議論とともにさまざまな研究がなされています。corrective feedback にはいろいろなタイプが考えられますが、最近注目を集めているのが recast と呼ばれる非明示的なフィードバックです。Recast の特徴は、学習者の誤りを会話の流れをそこなうことなく訂正することにあります。

1. (Teacher): So what did you do yesterday?
2. (Student): **I goed to the supermarket.*
3. (T): Oh, you *went* to the supermarket?
4. (T): What did you buy?
5. (S): Some vegetables, fruits, and milk.

この教師と生徒の会話の中で、生徒は誤った発話 (2) をします。それに対して教師は会話の流れを途切れさせることなく、しかし生徒の誤りを訂正した発話 (3) をしています。この (3) のような発話が recast と呼ばれ、生徒の誤りに対して negative evidence を提供していると考えられています。

Recast の第 2 言語習得への効果について、90 年代のはじめからさまざまな種類の研究が行われてきています。これまでの全体的な傾向としては、recast は第 2 言語習得に効果があると思われます（この分野に関しては Doughty and Williams (1998) と *The Modern Language Journal*, 82(3) (1998) が詳しく扱っているので参照してください）。

MERRIER Approach のうち, Expansion は「生徒の発話を何気なく修正したり, つけ加えたりして better な形に替えて話す」(渡辺・野澤・酒井, 1997b, p. 33) と定義されており, その特徴は recast と類似していることがわかります。したがって, recast が有効であるとするこれまでの第 2 言語習得研究は MERRIER Approach を間接的に支持していると言えるでしょう。

3. おわりに

本論では, MERIER Approach の有効性を, 第 2 言語習得研究の立場から間接的に支持することを試みました。インプット・インタラクションの修正がインプットの理解度を高めるという点と, recast の形で提供される corrective feedback が有効であるというこれまでの第 2 言語習得研究から, MERRIER のうちそれらと類似点を持つ Redundancy, Repetition, Interaction, Expansion の 4 つの指標は有用であろうと思われます。

本論で紹介したものも含めて, 第 2 言語習得の分野にはまだまだ不確定な要素が多くあり, さらに詳しい研究が待たれます。また, MERRIER Approach を広めていくためには, 今後 MERRIER Approach の効果を直接調査する研究も必要になるでしょう。

(ハワイ大学大学院)

註

1. Yano et al. (1994) では, インタラクション修正のかわりに elaborative modification という用語が使われています。このタイプの修正には, 繰り返し・付け足し・言い換えなどが含まれるのでインタラクション修正とほぼ同じであると考えられますが, Yano et al. の研究では reading input に焦点が置かれているためにインタラクションという用語を使用しなかったようです。

引用文献

- Doughty, C., & Williams, J. (1998). *Focus on form in classroom second language acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Krashen, S. (1985). *The input hypothesis*. London: Longman.
- Krashen, S., & Terrell, T. (1983). *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. New York: Pergamon.
- Long, M. H. (1983). Native speaker/non-native speaker conversation in the second language classroom. In M. A. Clarke & J. Handscombe (Eds.), *On TESOL '82* (pp. 207-225). Washington, D.C.: TESOL.
- Long, M. H. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. C. Ritchie & T. K. Bhatia (Eds.), *Handbook of second language acquisition* (pp. 413-468). San Diego: Academic Press.
- Swain, M. (1985). Communicative competence: Some roles of comprehensible input and

- comprehensible output in its development. In S. M. Gass & C. Madden (Eds.), *Input in second language acquisition* (pp. 235-253). Rowley, MA: Newbury House.
- 渡辺時夫. (1992). 「聞くことの教材のあり方」. 和田稔・羽鳥博愛・小池生夫 (監修). 『ECOLA 英語科教育実践講座 第1巻』 (pp. 67-82). 東京: ニチブン.
- 渡辺時夫. (1995). 「The Input Hypothesis (インプット理論): MERRIER Approach のすすめ」. 田崎清忠 (監修). 『現代英語教授法総覧』 (pp. 181-196). 東京: 大修館.
- 渡辺時夫・森永正治・高梨庸雄・斎藤栄二 (1988). 『インプット理論の授業』. 東京: 三省堂.
- 渡辺時夫・野澤重典・酒井英樹. (1997a). 「MERRIER Approach のすすめ 1: MERRIER Approach とは (1)」. 『英語教育』 4月号, 30-31. 東京: 大修館.
- 渡辺時夫・野澤重典・酒井英樹. (1997b). 「MERRIER Approach のすすめ 2: MERRIER Approach とは (2)」. 『英語教育』 5月号, 32-33. 東京: 大修館.
- White, L. (1987). Against comprehensible input: The Input Hypothesis and the development of L2 competence. *Applied Linguistics*, 8, 95-110.
- White, L. (1989). *Universal grammar and second language acquisition*. Amsterdam: John Benjamins. [千葉修司・ケビン・グレッグ・平川真規子 (訳). (1992). 『普遍文法と第二言語獲得』. 東京: リーベル出版.]
- Yano, Y., Long, M. H., & Ross, S. (1994). The effects of simplified and elaborated texts on foreign language reading comprehension. *Language Learning*, 44, 189-219.